

『それから』の無意識

藤 尾 健 剛

The Unconsciousness in *Sorekara*

Kengo Fujio

一

夏目漱石の『それから』（明42・6・27～10・14）は、神経質な享楽主義者長井代助を主人公として描いていることもあって、その描写は多彩な感覚表現にあふれている。多くの論者に注目されてきた植物の色彩に関する描写なども、その一つである。代助はまた、自己の内面に鋭敏な観察眼を注ぐ自意識家でもあって、さまざまな刺激が情調に及ぼす影響にも過敏な注意を払っている。刺激と情調（気分、情緒）との相関を描く、そのような一節は、あたかも心理学の教科書中にある説明の例証のごとき観を呈している。藤井淑禎は、『それから』の描写のこのような特徴——感覚表現の豊かさと範例的な心理現象の提示——が、文壇や学会の動向と呼応するものであることを指摘し、「最新の心理学が明らかにしたさまざまな知識・情報の啓蒙にまで踏み込んでしまっているところに、いかにも〈心理学の時代〉ならではの『それから』という小説の濃厚な同時代性を見る思いがする」と述べている¹⁾。

藤井のこのような評価は、ともすれば特権的に捉えられがちな漱石作品を、同時代の文脈のなかに置き直すことで相対化する意味をもつものだが、はたして『それから』は「濃厚な同時代性」を映すだけの作品だろうか。本稿は、この作品における無意識に関する認識と表現を検討しようとするものである。後に見るように、無意識ないし潜在意識に関する研究は、当時、国内外ですでに盛んに行われていたようだが、『それから』のこの方面の達成は、一頭地を抜くものであったと評価できる。

まず、次の一節から検討しよう。

先刻三千代が提げて這入て来た百合の花が、依然として洋卓の上に載つてゐる。甘たるい強い香が二人の間に立ちつゝあつた。代助は此重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪へなかつた。(中略)

「此花は何うしたんです。買て来たんですか」と聞いた。三千代は黙つて首肯した。さうして、

「好い香でせう」と云つて、自分の鼻を、^{はなびら} 瓣の傍迄持つて来て、ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を真直に踏ん張つて、身を後の方へ反らした。

「さう傍で嗅いぢや不可ない」

(十)

この後すぐ三千代は、「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」と尋ねる。三千代の兄菅沼が達者だつたころ、当の代助が百合を携えて訪れ、花瓶に挿して、菅沼にも三千代にも眺めさせたことがあつたという。三千代によれば、そのとき代助は、鼻を付けて百合の香を嗅いでさえたというのだが、代助の記憶ははっきりしない。「そんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑」しただけであつた。

この場面で冷淡な反応を示していた代助は、三千代に思いを告げる決意を固めた日、一転して、みずからたくさんの白百合を買い込み、その香りのなかに「自己を放擲」(十四)して、失つた記憶を回復している。「彼は此嗅覚の刺激のうちに、三千代の過去を分明に認めた。其過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這ひ纏はつてゐた」(同)。どのようなシーンが想起されたかの具体的な説明がなく、朦朧としているのは残念だが、とにかく過去の記憶が甦り、その記憶が代助と三千代との緊密な関係を確認するものであつたことは読みとれる。

白百合の匂いは、代助・三千代の愛の記憶と深く結びつたものだったに違いない。先の場面で代助の記憶に欠落があつたのは、百合にまつわる記憶表象が無意識中に抑圧されていたことを示すものであろう。三千代が百合の香を嗅いでみせたのに対して、代助は「思はず足を真直に踏ん張つて、身を後の方へ反ら」すという、不自然な、こわばつた反応を示していた。これは、精神分析でいう〈抵抗〉に相当する反応と見なすべきである。フロイトは、神経症の患者に、「病因性の観念の意識化(回想)に抵抗する力」があると指摘している。記憶表象を抑圧して、意識の水面下に押し下げている力が、その表象が再び水面上に浮上してくることに對する〈抵抗〉として働くのだという。匂いの刺激に触発されて記憶が喚起されかつたとき、代助が思わずとつた身体的反応も、これと同じ種類の現象であらう。

〈抑圧〉が、いつ頃、いかなる心的力によつて遂行されたかを確認しておかなければならない。現在にかぎつていえば、答えは明白である。すでに人妻となつた女性をかつて愛していた事実の記憶は、その感情が今も維持され、容易に現実的な行為に転化しうるほどのものだとするれば、社会的生命を危うくしかねない危険きわまるものである。記憶を意識下に押し沈めているのは、姦通罪に代表される社会的制裁に対する恐れで

ある。

しかし、平岡夫婦が上京し、三千代との頻繁な交渉が生じるに及んで、突如健忘症が始まったようにも思えない。後に代助は、三千代を平岡に「周旋」したことを振り返って、「僕の未来を犠牲にしても、君の望みを叶へるのが、友達の本分だと思つた。（中略）惜しい事に若かつたものだから、余りに自然を軽蔑し過ぎた」（十六）と語っている。当時の代助は、父得の道義觀の感化を受けて、「早く金（理想的道德家——引用者）になりたいと焦」（六）る青年であつた。〈抑圧〉がなされたのは、三千代を「貰ひたいと云ふ意志」を「打ち明け」（十六）られた時点である。平岡の申し入れは、「金にな」るための絶好の機会と映つたが、一方三千代への愛情も一通りのものでなかつたために、これを心の闇に葬る必要が生じたのだと思われる。代助は今に至つても、三千代を譲つた行為を、「過去を照らす鮮かな名譽」（八）と認識している。現在の彼は、「金になりたい」などと夢にも思わない、自他に対する幻想から覚めきつた人物である。その彼が問題の行為についてだけ古い幻想を引きずっているのは、いかにも不自然である。自己犠牲や利他的行為を理想化する古い道德觀が、〈抑圧〉を維持する機能を果たし続けていることを示すものである。

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」（十四）とつぶやきながら、百合の匂いのなかに身を投げ出したとき、代助は、「年頃」にない安慰を総身に覚え」（同）ている。これは、この「年頃」——おそらく三年前に三千代を断念して以来というものの、心身に圧迫を受け続けていたことを、裏側から証す言葉である。記憶表象が意識に上る道を絶たれたために、それに結びついた情動エネルギーがはけ口を失つて見えない圧力を及ぼしてゐたと考えられる。フロイトは、ヒステリー発症のメカニズムを、「興奮が心理的連想の中にはいりこんでいけない場合には、それだけ容易に、興奮量は身体神経支配にいたる正しくない道を見出し」、「心的興奮」が「肉体的なものに轉換」されると解説している。〈抑圧〉を解除する以前の代助を襲う不安や身体的失調の一部は、神経症と類比的なものと見なしうる。神経症の患者もまた、〈抑圧〉が取り除かれた後には、「重苦しいものがすっかりとれ」た（ミス・ルーシー・R）、「心的に荷が軽くな」つた（エリーザベト・フォン・R嬢）と感じている。

フロイトは、『ヒステリー研究』のなかで、いわゆる後催眠性暗示に関する興味深いエピソードを紹介している。ある娘が催眠術で暗示を受けて、全く面識のない裁判官を殺害しようと企てた。捕えられて犯行の理由を尋ねられると、自分が侮辱をこうむつたから復讐しないわけにいかかつたのだと、でたらめな動機を捏造したという。「真の原因が意識されることを拒む場合には、ためらわず別の結びつきが試みられる。そしてこの結びつきはにせの結びつきであるのに、当人はそれを信じているのである」。代助は、たびたび縁談を勧められたが、首を縦に振つたことがない。その理由として彼が用意しているのは、「彼の性情が、一図に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭が普通以上に鋭どくつて、しかも其鋭さが、日本現代の社会状況のために、幻^{イリュージョン}像打破の方面に向つて、今日迄多く費やされたのと、それから最後には、比較的金錢に不自由がな

いので、ある種類の女を大分多く知つてゐる」ために、すでに「結婚に興味がない」(七)という、たいへんものものしい理屈ばった弁明である。ところが、〈抑圧〉を除き去つて、三千代に愛を語る段になると、三千代の「復讐」(十四)、つまり無意識下にある三千代への未練のために、「貰はうと思つても、貰へな」(同) かつたのだと、まったく異なる理由を自覚するに至つてゐる。催眠術にかけられた少女と同様、無意識中の観念や感情に動かされながら、それを自覚できず、恣意的な合理化を行つていたのである。

三千代への愛の認識に関する代助の変化を、ウィリアム・ジェイムズのいう「潜在意識的潜伏」の現象から説明する向きもある。⁽³⁾後に述べるように、私も別の点でジェイムズの影響は否定できないと考えるが、百合の香に関する、代助の前後矛盾した言動は、フロイトの精神分析理論を特徴づける〈抑圧〉の概念を想定しないでは解けない。「私たちの意識的生活のどの瞬間においても、現実にあるものと、ただ潜在しているだけのものとの間に引かれる境界線は実にぼんやりとしている」(第十講)とか、「よく発達した識閥下の自己をもち、また漏れやすい、あるいは透過しやすい縁をもっている」(同)云々の言葉からも分かるように、ジェイムズにおいては、識閥の上下を簡単に行き来できる場合があると想定されている。意識と潜在意識の関係は、フロイトの意識と前意識の關係に似たものと思われる。フロイトでは、意識・前意識と無意識とのあいだには、検閲のしきりが置かれており、観念は自由な往来を許されない。

私は、『それから』には、ジェイムズのみならず、ル・ボンの「潜在意識」説の投影も見られると考えているが、他の同時代の思想家とフロイトとの相違は、〈抑圧〉の機制を考慮しているか否かにある。⁽⁵⁾漱石がフロイトの理論に直接接触した事実は確認できない。エレンベルガーによれば、一九〇六(明39)年から一九一〇(明43)年の時点で、フロイトの精神分析はすでに、「二種の思想運動の性格をおびて急速に成長し」、国際的な学会でもしばしばこれをめぐつて議論が戦わされたという。⁽⁶⁾とすれば、何らかの間接的な情報を得ていた可能性がある。もしいかなる接点もないとすれば、独力で精神分析の基礎的概念に到達していたことになる。

もっとも、『それから』の無意識理解が、フロイトふうの線で一貫しているわけではない。次の一節は、私たちをとまどわせる。告白がなされる十日ほど前のことである。

自分と三千代との現在の關係は、此前逢つた時、既に發展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人の過去を順次に溯ほつて見て、いづれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だ(十三)

ここでは、知的な省察の力だけで、現在のみならず過去の時間のなかにも、それまで自覚できなかった「愛の炎」が見出されているかに見える。とすれば、わざわざ百合の記憶を想起し、抑圧された感情を解放するにも及ばなかつたことになり、十四の場面は無意味なものとなつてしまふ。

しまう。漱石は、先の二つ場面では、意識と無意識を結ぶ通路が〈抑圧〉の機制によって遮断されているかのように描きながら、この場面では、〈抑圧〉の解除をへないまま、無意識に接近可能であるかのように捉えている。内外の研究者に先駆けて、フロイトと同じ理解に到達したかに見えた漱石だが、時代の限界、あるいは専門の心理学者でないことの限界は、やはり免れなかったようだ。

代助が白百合の匂いに触発されて過去の記憶を回復するという展開について、石崎等は、ヨーロッパ文学からの影響を指摘している。ツルゲーネフの『煙』（一八六七年）とダヌンツィオの『快樂』（一八八九年）で、前者はヘリオトロップの香りが、後者では白薔薇の匂いが、それぞれ昔の恋を甦らせる誘惑の小道具としての機能をもたされているという。石崎は、ダヌンツィオに張り合うかのように、『それから』に植物のイメージを氾濫させていることを踏まえて、『それから』は外国作品からフローラル・イメージの効果を巧みに借用し、白薔薇あるいはヘリオトロップを白百合という清純な花に変換することによって、独自の愛のかたちを織り上げた優れたテキストである^⑦と評価している。だが、先行作品では、『花の匂い』——記憶——誘惑——という過程が、一度に完結しているのに対して、『それから』では「誘惑」を退けようとして、「記憶」の想起に抵抗するという段階が書き込まれていることを見落とすべきではない。代助は、愛の記憶の回復が、彼を破滅に導きかねないという事情を抱えていた。『煙』や『快樂』にない、この特異な設定こそが〈抑圧〉の機制の発見をもたらしたものであったかもしれない。主人公の意識を、甘美な愛の記憶への没入という一方向の力にゆだねるのではなく、愛への傾斜と破滅への恐れとの二つの力が抗争する場として把握し、一方が他方を押さえつけて、意識の水面に浮かび上がれないような体制を維持していると理解したとき、フロイトふうの無意識の把握が成立したのではなかっただろうか。

代助は単に誘惑に抗しているにすぎず、精神分析に比較できるような発見がなされていると見るのは思い過ごしだと批判する向きもあるだろう。が、先に確認したように、愛を自覚することへの抵抗は、この場面だけでなく、数年間にわたって持続的ななされている。百合の香に身をゆだねたとき、代助が「年頃でない安慰を覚え」ていたことも、抵抗が一時的のものでなかったことを示している。恋人を譲った行為をいまだに「名誉」と心得ていることに関連して指摘したように、父親から受け継いだ道徳観念も、〈抑圧〉の体制を維持するのに加担していることや、〈抑圧〉の解除がなされてはじめて代助が結婚を拒絶し続けた真の動機を認識することなどを考慮すれば、漱石が意識を統べる普遍的なメカニズムの発見に至っていると考えざるをえないだろう。『それから』の作者がツルゲーネフやダヌンツィオに触発されながらも、人間心理に対する洞察を格段に深めていることは明らかである。

エレンベルガーの『無意識の発見』を読むと、一八八〇年代後半あたりから無意識ないし潜在意識を主題にした研究が続々と登場していることが見てとれる。ロンドン留学中から心理学関係の文献を渉猟していた漱石の目にした書物のなかにも、同じ問題に論及したものが少なくなかったと思われる。佐々木英昭は、ウィリアム・ジェイムズの他に、C・L・モーガンの『比較心理学序説』（一八九四年）やG・F・スタウトの『分析心理学』（一八九六年）などの手沢本を調査して、「“subconscious”を含む部分への下線などが多く見られる」と報告している⁽⁸⁾。

佐々木はまた、モーガン本の当該箇所を、翻訳を付して引用した後、「“subconscious”や“marginal consciousness”すなわち『辺端的意識』とが同一視されている」と指摘している。モーガンは、『文学論』（明40・5）冒頭の「意識の波」を説明したくだりで引き合いに出されている。「辺端的意識」は、「焦点的意識」に対する語で、意識の焦点に上る前後の「ぼんやりした諸要素」の謂いである。佐々木は、「三千代という『辺端的意識』をいかにして説得的に徐々に『焦点的意識』へと移動させるかが『それから』前半で作者が最も心を砕いたところであった」と述べている。確かに『それから』のプロットの展開は、三千代への愛が「辺端的意識」から「焦点的意識」へと変化する過程に相当すると理解することもできる。〈抑圧〉解除の操作をへないまま、現在および過去の「愛の炎」が確認される、十三の先の場面などは、三千代への愛がはじめて明確に「焦点的意識」に据えられた箇所と理解すべきなのかもしれない。どうやら漱石は、抑圧された愛情が意識化される過程と、辺端にあり、漠然としか感知できなかった愛情が、しだいに明度を増し、意識の焦点を占有するに至る過程とを、同時に想定してしまったようだ。代助が彼をとりまく複雑な状況によってしだいに追い詰められ、〈抑圧〉の解除を迫られていく過程と、三千代への愛情の自覚を深めていく過程は、まったく異質であるにもかかわらず、両過程をはっきりと分離しないまま混同してしまっている観がある。フロイトふうの無意識理解と、それに矛盾する表現が混在するゆえんである。

ところで、佐々木はスタウトの『分析心理学』⁽⁹⁾の手沢本に下線が見えると報告しながら、その内容を紹介する労をとっていない。同書巻末の索引を見るかぎり、「潜在意識」に言及しているのは、一箇所しかない。おぼつかない語学力ながら、以下に翻訳して引用する。

過去の経験の残余痕跡が意識の領域の外側に存続すると仮定することに代えて、その痕跡が注意を引くに至らないほど、表象の強度を極端に小さく押さえ続ける意識のシステムを仮定すべきだと、ときおり主張される。この、いわゆる「潜在意識的表象」は、複雑な全体性として経験されるが、表象間の差異は感知されない。ウォード博士によれば、「潜在意識的表象は、はっきりした特徴を与えるにたる強度の差異も、個々の弁別性ももたないが、日光や霧が風景の印象を変えたり、前に書いて消した文字がパリンプセスト（書いたものを消してまた

書けるようにした古代の羊皮紙——引用者——に反映するのと同様に、意識生活に影響を及ぼしうる」という。私は、このように説明される潜在意識的表象の存在を受け入れるにやぶさかではない。(中略)しかし、心的装置の全体、つまり過去の経験を刻印した残余痕跡の全システムが、このような形で私たちの意識生活の全瞬間に現前しているとは全く保証できないことのように思える。(中略)ウォード博士は次のように述べている。「あらゆる表象間の質的差異と、複雑な構造の弁別性は、ともに強度の減少とともに消滅する。この意味で、表象が識閾上に上ったときには明白で顕在的になる多くのものが、識閾下にある表象においては潜在的で隠れてしまうのだ」と。この言葉は致命的な馬脚を現しているように思う。この発言は、表象間の差異は、単に弁別されないだけでなく、経験されることさえなくなるのだということを示唆している。⁽¹⁰⁾(二四—二五頁)

ウィリアム・ジェイムズは、意識とは異なる潜在意識の領域が存在し、過去の記憶表象はそこに蓄えられると考えている(『宗教的経験の諸相』第十九講)。ウォードなる研究者は、そのような圏域を想定するのに代えて、強度を弱められて自覚できない形ながら、現在の意識のなかに存在すると考えているようである。その見えない記憶表象が、「潜在意識的表象」と呼ばれているものである。概念の内容といい、この概念が別の研究者のもので、著者自身はこれに否定的な態度をとっていることといい、『それから』と接点をもつとは考えにくい。

わが国では、福来友吉が、「精神の活動は必ずしも当人の自覚に現出するに限るものにあらずして、当人の自覚せざる所の精神活動もあるなり」と述べて、「潜在意識」に論及している。福来は、「外界事物を知覚し、他人の言語文章を理解する時にも、常に潜在的観念の働きつつあるを見るべし」として、いくつかの例を挙げている。たとえば、私たちが犬を目にするとき、自覚に上るのは犬の名辞や動物という観念など少数にすぎないが、他の多くの観念も潜在意識のなかで活性化されているという。また、次のような例。私たちは人生の機微をうがった優れた表現に出会うと、尽きない興味を喚起される。その表現が長年にわたる多くの経験と響きあい、深い真実を直感させるからである。だが、それがいかなる経験と対応し、どのような意味の真実を語っているかをうまく説明できないことがある。その表現は、潜在意識中の観念を刺激し、それを活動させているが、顕在意識に現出しないためである。——

福来のいう「潜在意識」中の観念は、たやすく「顕在意識」に転化しうるもので、フロイトでは前意識に相当する。福来が主としてウィリアム・ジェイムズの学説(『心理学原理』一八九〇年)に拠っている以上、〈抑圧〉の機制に関する認識が欠落しているのも、もっともなことである。

ところで、周知のように、漱石は同じジェイムズの著作でも、『宗教的経験の諸相』——人間性の研究(一九〇二年)の方に傾倒し、影響を受けてきた。この書物は、回心——たとえば自堕落な生活を送っていた人が、ある瞬間を境にして突如敬虔な宗教的人格に変貌する類の回心の

現象を、潜在意識の観点から説明しようとした著作であった。『それから』の代助も、三千代への愛を自覚する前後で、急激な変貌を遂げている。代助の性格の変化を描くに当たって、漱石は『宗教的経験の諸相』を念頭に置いていた節がある。

では、ジェイムズは、回心をどのように説明しているであろうか。

「人間の追求する『目的』は、それぞれ、ある特殊な種類の興味を喚起し、その喚起した興味に関連するもろもろの観念を集めて一つの群となし、これを目的に従属させる」（第九講）とジェイムズはいう。たとえば、オフィスにいて仕事に従事している時の私たちの意識は、業務上の「目的」に率いられた観念群に占有されていることだろう。そのときは意識の周辺に押しやられていた趣味に関する観念群は、休日ともなれば心の中心を占めるに至るかもしれない。私たちの心は、相互に支援しあい、あるいは阻止しあう諸観念の集合によって構成される一つの体系と見なすことができる。私たちの生活に人生の意義と呼べるような主要な目的があるとすれば、それが心の体系の中心にあつて、他の目的に従属する観念群を制御していると考えられる。

私たちが年齢を重ね、新しい経験や知識を蓄積すること、観念群は成長したり衰えたりする。これまで知られていなかった新たな観念群が付け加わることもあるだろう。このような変化は全体のバランスに影響を及ぼさずにはいない。体系全体が倒壊に瀕し、かろうじて惰性だけで支えられていることもあるだろう。回心とは、バランスを失った心の体系が建物全体を支えるにたる新たな目的を中心にして再編成されることである。ジェイムズは、純粹に宗教的な意味での回心を、「それまでその人間の意識の周辺にあつた宗教的観念がいまや中心的な場所を占めるにいたること、宗教的な目的がその人間のエネルギーの習慣的な中心をなすにいたること」（同）と規定している。

回心は、意志的・漸次的にも生じるが、突発的に起こることが少なくない。ジェイムズによれば、突然の回心は潜在意識の発達した人を襲うことが多い。心の再建を促す動機やエネルギーが潜在意識のなかで準備され成熟するために、性格の変化が忽然と実現するのだという。

突然の回心を経験した人は、その神秘的な現象を神の「恩寵」と受けとることが多いというが、これは、代助が三千代への愛を「天意」としか考へ得られな」（十三）と感じていたことを想起させる。ジェイムズは、「意識の彼岸の領域から侵入してくるものは、確信を強める特殊な力をもっている。（中略）その当人は、現実的に、自分の意志を超えた力によって自分が操られていることを感ずる」（第十九講）と述べていたが、代助も、無意識の闇から突出して、彼を引きずっていく力を、超越的なものの働きと考えたかもしれない。

回心経験者は、回心する以前、深刻な分裂に陥って苦しんでいた、人生の意義を疑い、自己の現状に激しい呪詛を抱えていることが少なくない。心の体系を構成する観念群のあいだに、和解しがたい軋轢があつたり、中心的な目的が求心力を失い、他の観念群を制御できない状態に陥っているのである。代助は、回心以前、たびたび「アンニユイ」に襲われ、「活力」ないし「生活力の不足」（十一）を痛感し、従来の生き方

に懷疑の目を向けざるをえなくなっていた。加えて、「昼夜の区別なく、武装を解いた事のない精神に、包囲され」(同)て生きることに伴う「不安」にも、動揺を余儀なくされていた。ジェイムズの紹介する回心経験者のそれに比較できるかどうかはともかく、代助なりに一種の危機に直面していたことは疑えない。危機に曝されてぐらつき始めた建物に代えて、三千代への愛を中心的な「目的」として心の体系を再建する心的過程が、潜在意識のなかで準備され、進行していたのであるうか。

代助の変貌がジェイムズの回心と共通する点があるのは否定できないが、では代助の性格は、具体的にどのような変化を遂げているのだろうか。

代助は新聞に出た学校騒動に関連して、「今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね」(一)と語っている。数年前、平岡と交際していたころの彼は、「人の為に泣く事の好きな男であ」(八)り、「互に凡てを打ち明けて、互に力に為り合ふ様なことを云ふのが、互に娯楽の尤もなるものであつた」(二)。信義に厚い利他主義者から、覚めた利己主義者へと、ごく短期間のあいだに一八〇度といつていいほどの極端な変貌を遂げていることになる。

これは物語開始以前に属す変化であるが、三千代に関する一連の言動を見ると、数年前の傾向が復活している兆しが認められる。彼女を苦しめる負債をつぐなうために奔走したり、旅行のための費用を生活費に用立てているのは、利己主義に居直る彼らしくないふるまいといわざるをえない。「彼は夫の愛を失ひつゝ、ある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝ、ある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた」(十三)とあるように、代助の愛情を募らせているのは、もっぱら「氣の毒」という利他的な感情である。佐川の娘との縁談に関して、得は、「独立の出来る丈の財産」や「洋行」(九)の条件までちらつかせていた。一方、三千代を選択した場合に彼を待ち受けていたのは、生活費の途絶と罪人の烙印であつた。このような悪条件にもかかわらず、代助は三千代と生きることを選択したのである。行動のあらゆる動機を「損得問題」(一)に還元していた人間の面影は完全に消失している。代助はかつての利他主義の大半を、「親爺が捺摺り付けた」^{めっき}「渡金」にすぎず、「次第々々に渡金を自分で剝がして来た」(六)と認識していたが、古い道德観は彼自身が自覚するよりも深く精神に根を下ろしていたようである。確かに代助にも急激な性格の変化が生じているが、変化後の彼は、数年前の代助に逆戻りしているのである⁽¹²⁾。

代助の変化に関して、もう一つの特徴を確認しておきたい。「代助は小供の頃非常な肝癰持で、十八九の時分親爺と組打をした事が一二返ある位だが、成長して学校を卒業して、しばらくすると、此肝癰がぱたりと已んで仕舞つた」(三)という。「激する事は近來殆んどない」(四)とあつたのも、同じ変化を物語るものだろう。高度に発達した知性が、感情の素朴な発露を抑圧してしまっているのだと考えられる。「代助は人と応対してゐる時、何うしても論理を離れる事の出来ない場合がある」(九)などの箇所からも窺えるように、論理の脈絡に細心の注意を払い、小

さな兆候からも隠れた真相を探り当てようとして、知性を活発に働かせる習慣を身に着けた人が、激情から遠ざかるのは見やすい道理である。「[nii admirari の域]」(二)に達した現在の彼を形成していたのは、もっぱら知性の働きであった。彼特有のライフスタイルも同様である。「自然」に従う独自の倫理観にせよ、高等遊民として身を処していることにせよ、結婚せずに芸妓との交渉を継続している点にせよ、すべてに知的な理由づけがあり、知的判断の導きに従っている。

ところが、三千代への愛の自覚を深めていくのと並行して、代助の知性は無力化していく。その過程は論証するにも及ばないであろう。代助の変貌のもう一つの面は、知性主導のもとに形成されたものの剝落であり、知性の無力さの露呈であった。

ジェイムズの図式を適用して、ごく単純化していえば、代助の回心は、美的生活を中心目的とする旧体制から、愛を中核とする新たな心の体系への変化と理解できる。が、変化の内実を検討すると、数年前の性格の回帰と知性の無力化という二つの特徴が浮かびあがった。ジェイムズの理論に還元してしまうには、あまりに特異な変化といわざるをえない。無意識的・潜在意識的な心的過程を伴う性格の激変という点では、ジェイムズに対応するのだが、変化の内実の点で、そこからはみ出すものがあることは否定できない。

私は、代助の変化の特徴は、ル・ボンの『社会主義の心理学』(一八九八年)における「潜在意識」概念を前提とすることで、はじめて正当に位置づけうると考えるが、その点の論証は次節で行う。この節の最後に、代助の性格の変化が何に促されて生じたか。また、その変化がどのような意味をもつかを検討しよう。

代助は、佐川の娘との縁談を強硬に進めようとする父の真意が、自身の経営になる事業の安定に資することにあり、極端に言えば、息子を金儲けのための道具として利用しようとしているらしいと察したとき、「人と人との間に信仰がない原因から起る」「不安」に「襲はれ」(十)始めている。家族のなかで唯一信頼を置いていた嫂でさえ、この問題では策を弄して父に加勢しようとしていることを思い知らされた。代助が三千代への執着を深めていく過程は、家族から孤立し、周囲の人とのあいだに人間的な絆が失われているのを痛感していく過程でもあった。「現代の社会は孤立した人間の集合体に過なかつた」(八)とか、「文明は我等をして孤立せしめる」(同)と、知性で割り切つてはいても、いざ代助みずからが他者の欲望充足の手段として扱われ、「劇烈な生存競争場裏」(同)に四面楚歌の局面に立たされるに至ったとき、「安住の地」(同)を求める強い欲求を意識せざるをえなかつた。「彼の心」(同)は、「彼の頭」ほどには「進化」(二)していなかつたのである。

父から執拗に縁談を強いられた翌日、代助は日中にもかかわらず、鈴蘭の香りが匂うなかで眠りを貪った。睡眠が一種の退行だとすれば、代助の退避先は、過去を遡って、どの時点に行き着いたのであろうか。眠りのさなかに、「誰かすうと来て、又すうと出て行つた様な心持がした」(十)。買い物の途中で立ち寄った三千代の影であったが、それは代助の無意識のなかに揺曳する、過ぎ去った日の彼女の影でもあったに違いない。

い。三千代への愛の復活は、かつて平岡と代助のあいだ、あるいは菅沼兄妹と代助のあいだに成立していた、「互に凡てを打ち明けて、互に力に為り合ふ様な」(二) 関係の復活であり、人と人が「信仰」で結ばれていた時代への回帰を意味していた。

三

漱石が『社会主義の心理学』⁽¹³⁾に接したのは、留学末期のころか、帰国後『文学論』の講義(明36・9・38・6)を準備していた時期と思われる。私は、別稿において、『それから』の執筆に当たって、これが利用されたと推定した。⁽¹⁴⁾代助の文明批評の一部は、ル・ボンが西洋文明の現状を批判した箇所に重なり、類似した表現が見られる。同書には、“sub-conscious”の語が何度か使用されている(ただし、手沢本にこの語への下線は見られない)。深層心理の理解の点でも、示唆を得ていた可能性がある。

『社会主義の心理学』がどのような書物であるかは、別稿を参照していただくことにして、ここでは「潜在意識」に関する見解だけを紹介する。「人間は、さまざまな外的条件に支配されているが、それに加えて、とりわけ二種類の観念によって生活を導かれている」とル・ボンはいう。二種類の観念とは、「祖先から受け継ぎ、情操化された観念と、後天的に獲得した知的な観念である」。「祖先から受け継いだ観念は、民族の伝統であり、直接に接する祖先やはるか以前の父祖からの相統物であり、生得的に与えられた無意識的な遺伝である。これが行為の主要な動機を決定する」。一方、「後天的な知的観念は、本人が環境と教育の影響下に獲得したものである。それは、推論や説明、議論などを支援するが、行為の原因になることは極めて稀である。後天的・知的観念は、何度も繰り返されて遺伝的に蓄積されることで、潜在意識に浸透し、情操と化するでないかぎり、行動への影響力は実質上ゼロにとどまる」。⁽¹⁵⁾(六一―六二頁)

あらゆる文明は、各民族が祖先から受け継いだ観念のうえに建設される。「文明の全要素——言語、芸術、慣習、制度、信仰——は、一定の精神構造の所産であって、それゆえそれを別の民族に移そうとすれば、根本的な変容を蒙ることになる」⁽¹⁶⁾(三四頁、漱石の脇線がある)。文明と民族の潜在意識的観念のあいだにかくも緊密な関係があるとすれば、文明の方向を急激に転換する試み——たとえば革命は、実質上不可能になる。「ラテン民族のあいだに個人主義が制限された形式のもとにであれ、全面的に発展したのは最近のことにすぎず、とりわけフランス革命以来である」とル・ボンはいう。「不幸なことに、ラテン民族は祖先から受け継いだ資質やそれまでの制度、教育のせいで、自立にも自律にも適さない(中略)革命の理念は、階級と組織を粉砕し、あらゆる個人を共通のタイプに還元し、こうしてもとのカテゴリーから引き離したこれらすべての個人を、強固に集権化された国家の保護のなかに吸収することであった。これほどアングロ・サクソン流の個人主義と対立するものはありえない。アングロ・サクソンの個人主義は、個人の団結に肩入れし、そうすることですべてを獲得しようとするものであって、国家の活動を狭い限

界内に限定しようとするものである。大革命の仕事は、一般に信じられていたよりは革命的でないのだ。国家への吸収と中央集権化を極端にまで押し進めることによって、大革命は何世紀にもわたる君主制を通して深く根づき、あらゆる政府によって等しく踏襲されてきたラテンの伝統を継承したのだった⁽¹⁷⁾（二五―二六頁）。

さて、現代人もまた、「制度や道徳観がそれに基づいて構築されているところの信念（情操化された観念―引用者）を遺伝によって所有しているが、その信念は、今日理性とのあいだに絶えざる葛藤を生じている。それゆえ、現代人は、古い信念と充分調和するとともに、現在の思想とも一致する、慎重に打ち立てられた、新しい教説を探し求めるよう余儀なくされている。過去と現在とのあいだ、言い換えれば、潜在意識的本性と自意識的理性とのあいだの対立のなかに、今日の精神の無政府状態の原因が見出されるべきである」⁽¹⁸⁾（八三頁）。――

漱石は『文学論』のなかで、『社会主義の心理学』を、「通俗にして学説の深奥なるものなし」（第五編第一章）と評していた。ここに紹介した議論に関しても、観念の遺伝を想定するなどの杜撰さを指摘せざるをえない。が、学説としての価値の高さが、必ずしも創作に優れたヒントを与えることにつながるわけではないだろう。粗笨とみえる見解が、インスピレーションの貴重な源泉になることもありうる。

ル・ボンの「潜在意識」説に関して、当面注目したいのは、一つには、過去から伝承された観念が潜在意識に浸透して、人間の本性を形成している点である。観念の遺伝を想定するのがいけないなら、幼いころから慣れ親しんだ伝統的な観念が人格の基底部を形成しているという形で理解しておこう。もう一点は、後に獲得した知的な観念は、人格の表層にとどまり、持続性の点でも、行為の動機となる点でも、はるかに無力だという点である。代助の変貌は、無意識ないし潜在意識に潜むものが顕在化した結果引き起こされたと理解できる。しかも、知性の力で形成されたものが崩壊した後に、主として父親の感化のもとに育まれた古い観念を核とした性格が出現したと受けとれる。ル・ボンの学説との共通性は明白であろう。

『社会主義の心理学』の手沢本への書き込みの量は、総じて決して多い方ではない。先に引用した文章も、一部に脇線が見られる程度であった。が、引用文がいずれも、四〇〇頁を超す書物の、比較的前の方に偏っていたことに注意されたい。フランスやラテン民族に関する議論は随所に見られるが、潜在意識への言及は前半部分に集中している。別稿で推測したように、『それから』の執筆前に、この書物の再読がなされたとすれば、必ず目を通していると思われる箇所である。

本稿の最初の節で、代助が〈抑圧〉を解除することで、失われた過去を取り戻す過程を確認した。その前後で、代助の性格に変動が生じることを勘案すると、どうやら回復されたのは、特定の記憶だけにとどまらなかったようだ。意識の深層に潜んでいた観念群までが掘り起こされたと考えられる。具体的にいえば、伝統的な利他主義的道徳観であり、他者と全幅的な信頼で結ばれた共同性に関わる観念である。数年前まで代

助の心の体系の中核を占めていたこれらの観念群が、知的観念に代わって、再び中心に据えられ、それを核とした新たな体系が建設された。フロイトとウィリアム・ジェイムズとル・ボンの理論を接ぎ木した、このようなプロセスをへて、代助の新生がなったものと思われる。

ところで、ル・ボンは、フランス革命は形を変えて伝統を継承したにすぎないと見ていたが、明治維新以来の日本は、どのように評価できるだろうか。実は、『社会主義の心理学』には、この問題に言及した箇所がある。同書第四部で、ル・ボンは、西洋諸国間で熾烈この上ない経済闘争が行われているばかりでなく、いまや西洋と東洋のあいだでも、同じ闘争の火蓋が切られた、と指摘している。とりわけ極東の国日本の経済力の成長はめざましく、低賃金労働を武器にして、東洋からヨーロッパ資本を駆逐しつつあるだけでなく、西洋の市場に参入する勢いさえ見せようとしている。西洋は、この新たな敵を前にして、劣勢を強いられつつある。——このように述べた後、「ヨーロッパは老衰の兆しを示している。来る世紀は、ヨーロッパの骨組が解体し、ヨーロッパ諸帝国の崩壊を目の当たりにすることになるだろう」との大隈重信の発言を引用して、次のように予言している。

私は、ヨーロッパよりもはるかに早く日本が滅亡すると信じている。それはただ、日本が自国固有の文明に、みずからの過去と何ら共通点のない異質な文明を、両文明を融合させることのできないまま積み重ねており、結局接ぎ木された文明がやがて日本を完全な無政府状態に導くことになるという理由からである。しかし、中国は多くの点で、とりわけ商業上の正直さという問題で、日本よりもはるかに優れており、力強い未来を約束されている。⁽¹⁹⁾ (二三〇頁)

同じ段落はこの後も若干続くが、省略する。この箇所は別稿でも取り上げているので、そちらを参照されたい。漱石は、このパラグラフ全体の左横にサイドラインを引き、余白に、“Destinies of Japan & China” “Of course. Think a little and find out its cause.” “What sweeping arguments are these.”などと書き付けている。これらの句はサイドラインからさらに線を延ばして書き込んでいるため、個々のコメントがル・ボンのどの言葉に対するものなのかを正確に特定することはできない。

日本の滅亡に関するル・ボンの予言は、彼の文明観に根拠づけられている。民族の潜在意識に浸透した観念と緊密に結びついているはずの文明の方向性を、外部からの圧力で急激に転じようとするれば、人々の精神に深刻な混乱をもたらし、破局的な結果を引き起こすのを避けられない、というのがル・ボンの論理である。

お気づきのように、ル・ボンの議論は、講演「現代日本の開化」(明44・8)で、明治以来の文明の「外発」性を告発した漱石の論旨と通い合うものである。自身の日頃の所感と契合するものがあると感じたからこそ、「いうまでもない」と受けとめたのであろう。「なんと粗雑な議論か」と呆れたのには、二つの要因が考えられる。一つは、異質な文明を受け入れ、過去と断絶せざるをえない点で、中国と日本に差がないはずなの

に、日本の滅亡だけを結論している論理的矛盾に対してであろう。もう一つの要因は、「もう少し考えて、その原因を見いだせ」と書いた点にも関わるだろう。当のル・ボン自身が『社会主義の心理学』の別の箇所で強調しているように、地球規模の弱肉強食の経済闘争が繰り広げられている時代に、日本がいつまでも旧来の文明に固執していたなら、西洋の属国に転落する運命を免れなかったであろう。漱石の不満は、「涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならない」（『現代日本の開化』）近代日本の窮境に想到しようとし、ない点に向けられていたと思われる。

さて、話題を再び『それから』に戻そう。この作品では、「恋愛を中心とする根源的な生の不安」と、学校騒動や日糖事件に代表される「社会的⁽²⁰⁾不安」が深い関連をもつもののように描かれている。はやくも作品冒頭から両者は相呼応して露頭し、しばらく伏流した後、時を同じくして顕在化している。代助が意識下に抑圧した感情に揺さぶられ脅かされるのと並行して、社会にも不穏な震動が走り、内部に蓄積された混乱や腐敗が露呈していく。ル・ボンの文明論を前提にすれば、二種類の「不安」が換喩的に結びつけられている理由が納得できるだろう。過去と現在のあいだ、深層と表層とのあいだに矛盾を抱えているのは、ひとり代助だけではなかった。日本の文明それ自体も同じことである。日糖事件に代表される「社会的不安」は、過去と接点をもたない、俄か普請の文明の危うさを象徴するものである。代助を脅かす「生の不安」が過去からの呼びかけであるとともに、知性の力だけで構築された現在の生活の脆弱さに対する警告であったのに対応するものである。

いうまでもないが、過去を回復する代助の選択は、日本の近代への本質的な批判を含意する。過去を置き去りにしたまま、別の方向をたどろうとする文明の流れを押しとどめ、それを再び確実な根底の上に据え直そうとするものと意義づけることができる。もちろんそれは孤独で、非力な抵抗にすぎないが、現代の私たちに對しても有効性を失わない、長い射程をもつメッセージを含んでいると評価できるだろう。

注

- (1) 『『それから』の感覚描写』（『漱石研究』第10号、平10・5）。
- (2) 『ヒステリー研究』。原典刊行は一八九五年。引用は、『フロイト著作集』第七卷（懸田克躬・小此木啓吾訳、昭49・12、人文書院）に拠る。周知のように、この書物はブロイヤーとの共著だが、本稿の引用は、フロイト単独の執筆になる部分に限定している。
- (3) 重松泰雄（『文明批評』のタブロオ——『それから』解説）（『漱石 その歷程』平6・3、おうふう）。
- (4) 『宗教的経験の諸相——人間性の研究』上（枅田啓三郎訳、昭44・10、岩波文庫）。下の刊行は、昭和四五年二月。
- (5) フロイトは、「精神分析の研究が行われるまでは、この抑圧という概念を指定することはできなかったのである」（中山元訳『S・フロイト 自我論集』（平8・6、ちくま文庫）所収の「抑圧」と述べて、『抑圧』の概念が自身の独創になるものであることを強調している。

フロイトとのあいだに、しばしば優先権問題が議論され、フロイトの側の剽窃さえ云々されることのある研究者に、ジャンネ (Pierre Janet) がいたが、無意識 (的固定観念) を派生させる「心的分裂」を、ジャンネのように、「統合のために働く心的装置の不完全さ」によって説明するのではなく、〈抑圧〉の機制によって説明する点に、両者の決定的な相違があるとするフロイト側の言い分 (高橋義孝他訳『フロイト著作集』第十巻 (昭58・10、人文書院) 所収の「精神分析について」) は、今日肯定的に受けとめられているようである (A・ロレンツァー『精神分析の考古学 —— 親密性と社会的苦悩』河田晃訳、昭62・9、誠信書房)。

(6) 『無意識の発見 —— 力動精神医学発達史』下 (木村敏・中井久夫他訳、昭55・9、弘文堂) の第十章。上の刊行は同年六月。

(7) 『夏目漱石 テクストの深層』(平12・7、小沢書店) の「代助の感性革命 —— 『それから』における世紀末文化演習」。

(8) 『漱石文学全注釈』8 (平12・6、若草書房)。なお、『文学論』への『比較心理学序説』の影響を検討したものに、「Monconscious Theory」と『文学論』——ロイド・モーガン『比較心理学』の影響 (一)」「国文学ノート」第30号、平5・3) をはじめとする小倉脩三の一連の論考がある。

(9) Stout (G.F.), *Analytic Psychology*. 全二巻中の第一巻「緒論第三節」(2) の *The Hypothesis of Sub-Consciousness*。

(10) 原文は次の通り。“It is sometimes urged that instead of assuming residual traces of previous experience persisting outside the sphere of consciousness, we should assume a system of persisting modifications of consciousness of so extremely low a degree of intensity that they have no appreciable power to influence the direction of attention. These “sub-conscious presentations,” as they are called, are experienced as a complex totality, but their differences are not distinguished. To quote Dr. Ward, they “may tell on conscious life, as sunshine or mist tells on a landscape or the underlying writing on a palimpsest, although lacking either the differences of intensity or the individual distinctness requisite to make them definite features.” I freely admit the existence of sub-conscious presentations as thus describe ; ... But it seems to me quite unwarrantable to assume that the totality of our mental acquisitions, the whole system of residual traces deposited by previous experience, is or can be present in this form in every moment of our conscious lives. ... He says : “The qualitative differences of all presentations and the distinctness of structure of such as are complex both diminish with a diminution of intensity. In this sense much is latent or ‘involved’ in presentations lying below the threshold of consciousness that becomes patent or ‘evolved’ as they rise above it.” These words seem to contain a fatal admission. They imply that presentational differences not only cease to be distinguished, but cease to be experienced.”

(11) 『催眠心理学概論』(明38・6、成美堂書店)。

- (12) 重松泰雄「夏目漱石——起点としての「それから」を中心に」(『日本近代文学』第17集、昭47・10)に、私見と通じる見解がすでに
出されている。
- (13) Le Bon(G.). *The Psychology of Socialism*. 1899。フランス語原典の刊行は一八九八年。
- (14) 「集合意識・現代文明・社会主義——漱石とル・ボン著『社会主義の心理学』」下(『香川大学教育学部研究報告』第一部・第97号、平
8・3)。上は「香川大学 国文研究」第20号(平7・9)に掲載した。
- (15) 原文は次の通り。“In addition to the exterior and variable conditions to which he is perforce subject, man is especially guided in life by
conceptions of two kinds—*ancestral or sentimental concepts* and *acquired or intellectual concepts*. / *Ancestral concepts* are the heri-
tage of the race, the legacy of ancestors immediate or far removed, an unconscious legacy bestowed at birth, and which determines the prin-
cipal motives of conduct. / *Acquired or intellectual concepts* are those which man acquires under the influence of his environment and
education. They aid him to reason, to explain, to discourse, but are very rarely the cause of his conduct. Their influence over his actions re-
mains practically nil, until, by repeated hereditary accumulations, they have penetrated his sub-consciousness and have become sentiments.”
- (16) 原文は次の通り。“...all the elements of a civilisation—language, arts, customs, institutions, beliefs—were the consequences of a certain
mental constitution, and therefore could not pass from one nation to another without undergoing profound transformations.”
- (17) 原文は次の通り。“It is only in our days, and above all since the Revolution, that Individualism, at least under certain forms, has at all de-
veloped among the Latin races. These peoples are unfortunately but little adapted, by their ancestral qualities, their institutions, and their
education, to rely upon themselves or to govern themselves. ... The revolutionary ideal was to shatter the classes and corporations, to reduce
every individual to a common type, and to absorb all these individuals, thus dissociated from their categories, into the guardianship of a
strongly centralised State. Nothing could be more strongly opposed to the Anglo-Saxon Individualism, which favours the banding together of
individuals, obtains everything by it, and confines the action of the State within narrow limits. The work of the Revolution was far less revo-
lutionary than is generally believed. By exaggerating the absorption and centralisation of the State it only continued in a Latin tradition deeply
rooted through centuries of monarchy, and followed by all governments alike.”
- (18) 原文は次の通り。“We may sum up this and the preceding chapter by saying that...; that) modern man possesses by inheritance the be-
liefs on which his institutions and his moral ideas are still based, but that these beliefs are to-day in perpetual conflict with his reason. From

this he is reduced to seeking for elaborate new dogmas which shall be sufficiently attached to the old beliefs, and shall yet conform with his present ideas. In this conflict between the past and the present, that is, between our sub-conscious nature and our self-conscious reason, are to be found the causes of the present anarchy of minds."

- (19) 原文は次の通り。"I believe Japan will be ruined long before Europe, for the simple reason that she has superimposed, on her own civilisation, and without being able to fuse the two, another civilisation which has nothing in common with her past, and which will presently lead her into the completest anarchy. But China, by far the superior of Japan in many respects, and notably in the matter of commercial honesty, is destined to have a powerful future."

- (20) 猪野謙二「『それから』の思想と方法」〔明治の作家〕昭41・11、岩波書店。